

# 認知症高齢者へのかかわり方に関する動画教材を 介護施設実習で活用した学習効果

## Learning effect of by using video teaching materials on how to Interact with elderly people with dementia in nursing facility training

兼松由紀子<sup>1)</sup>・平澤園子<sup>1)</sup>・樋田小百合<sup>1)</sup>

Yukiko KANEMATSU, Sonoko HIRASAWA, and Sayuri TOIDA

抄録：A大学では、認知症高齢者とのかかわり方がイメージできることを目的に動画教材を独自に作成した。動画の活用状況を調査した結果、介護施設実習前に動画視聴回数が最も多かった動画コンテンツは、「ライフヒストリー聴取」であった。介護施設実習において認知機能低下の高齢者と関わった学生は92%を占めた。認知症高齢者への看護介入において学生が「実施できた」と評価した項目は、「患者と視線が合う位置で話しかける」「聴力に応じたコミュニケーション」「自尊心に配慮し、間違いや失敗は指摘しない」の順に多かった。自由記載からは、【ライフヒストリーカードの活用方法を理解し実施できた】【認知機能評価についての理解が深まった】【認知機能に応じたかかわりが実施できた】の3カテゴリーが抽出された。研究者らが作成した動画教材は、認知症看護における基本姿勢を学ぶ一助となりうることを示唆された。

キーワード：認知症高齢者 動画教材 介護施設実習

### はじめに

団塊の世代が後期高齢者となる2025年において、認知症高齢者が約700万人に達すると見込まれており（内閣府、2017）認知症高齢者が看護の対象となる割合は、今後さらに増えるといえる。そのため看護基礎教育では、認知症に対する正しい知識に加え、認知症高齢者とのコミュニケーションの在り方など、認知症看護における基本姿勢の習得が求められる。特に臨地実習では、認知症高齢者の特徴を理解してコミュニケーションから関係性を築くことや、ニーズを捉えることも必要な看護技術である。学生は、高齢者の同居率の低さ（内閣府、2021）から日常生活の中で高齢者と接する機会は少ない。さらに認知症高齢者と接したことがない学生にとって認知症症状による会話の不成立、意思疎通ができない、否定的反応の対応が課題と考える。そこで認知症高齢者と看護者とのかかわりの動画教材が提示され、それを繰り返し視聴できる学習環境が整っていれば、認知症高齢者とのかかわり方に関するロールモデルとなり、臨地実習のコミュニケーションの実践の助けになるのではないかと考えた。老年看護学領域における視聴覚教材の活用効果として、コミュニケーション場面を視聴することで、非言語的コミュニケーションや対象の反応をとらえる視点に

気づくこと、言動に対する理解を深めること（葛原ら、2013）が期待できる。しかし、既存の動画教材では、認知症高齢者に対するコミュニケーションで教員が伝えたいと考えている教材が見当たらなかった。そこで、A大学では認知症高齢者のかかわり方をイメージできることを目的に、教員が伝えたいと考える認知症看護における基本姿勢を取り入れ、独自の動画教材を作成した。この教材は、老年看護学実習前に実習に向けた実践的な思考を学ぶために紙上事例による看護過程の授業でもすでに活用しているが、引き続き老年看護学実習Ⅰ（以下、介護施設実習）の事前学習として繰り返し視聴できる環境を整えた。以上のことから介護施設実習に向けての学生の動画教材活用状況と、実習におけるコミュニケーションの自己評価における分析から、動画教材の学習効果について検討したため、ここに報告する。

### I. 研究目的

本研究では介護施設実習における動画教材の活用状況および認知機能が低下した高齢者の看護介入の自己評価を調査し、動画教材の学習効果について検討することを目的とした。

1) 看護リハビリテーション学部看護学科

表1. 老年看護学における認知症看護に関する学び

科目名	履修学年	認知症看護の学びの内容
老年看護学概論	1年次後期	加齢による認知機能低下、高齢者の権利擁護
老年臨床看護Ⅰ	2年次前期	認知症の病態および症状、認知症高齢者への看護
老年臨床看護Ⅱ	2年次後期	認知症高齢者の紙上事例による看護過程演習
老年看護学実習Ⅰ	3年次前期	介護施設における看護実践（1週間：1単位）
老年看護学実習Ⅱ	3年次前・後期	医療施設実習における看護実践（3週間：3単位）

## II. 研究方法

### 1. 研究対象者

#### 1) 研究対象者

本研究の対象者は、研究期間内である2023年5月時点で、A大学看護学科に在籍し、老年看護学実習Ⅰに履修登録している3年生のうち、研究参加に同意が得られた72名を対象とした。

#### 2) 研究対象者の学修背景について

研究対象者は、高齢者を対象とした看護について、1年次に老年看護学概論、2年次に老年臨床看護Ⅰ・Ⅱをそれぞれ単位修得済みである。このうち、各講義における認知症看護に関する学修状況について、表1に記載した通りである。

今回の調査対象とした介護施設実習は、3年次5月～6月にかけて履修する実習であり、介護老人保健施設、特別養護老人ホーム、介護医療院のいずれかの1週間1単位の実習である。新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後であったが、感染防止のため介護施設2日間、学内3日間で実施した。

実習は主に認知機能および身体機能の低下をかかえた高齢者とのコミュニケーションおよび日常生活援助を学ぶ場と位置付けている。また、研究対象者が所属するA大学では、2020年度以降の入学生に対して、Windowsが搭載されたタブレットパソコンを配布している。また各講義室では学内LANに接続できる環境が整っている。

### 2. 動画教材の作成

本研究のために作成した動画は、認知症高齢者へのかかわり方に関するものである。

動画は老年臨床看護Ⅱの看護過程で用いる事例（80歳代女性、右大腿頸部骨折、脳血管性認知症、日常生活自立度B2、認知症高齢者日常生活自立度Ⅱb、要介護3）に対する以下の5つの看護場面である。教材の作成は2022年7～8月に行った。動画教材の撮影および出演は全て老年看護学領域の教員が担当した。

#### 1) [バイタルサイン測定]

認知症高齢者は、自ら身体的不調を正しく訴えることが困難であるため、本人の主訴だけでなく、客観的な症状も併せて観察することが重要である。そのためバイタ

ルサイン測定時、日常会話における言動から短期記憶障害や見当識障害などの認知機能を評価する重要性を学ぶ機会とした。

#### 2) [長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）]

HDS-Rは、認知症評価として多く用いられている評価項目である。実習での受け持ち患者情報としても提示されていることが多い。HDS-R評価の場面で回答が間違っている場合はどのような対応をするのかを示し、評価方法および評価基準について学習する機会とした。

#### 3) [日常生活援助]（図1）

認知症の中核症状である失行や実行機能障害への対応として、認知症高齢者のもてる力を最大限に引き出すようななかかわりについて学ぶ機会とした。



図1 動画教材 [日常生活援助] の様子

#### 4) [リハビリテーション]

リハビリテーション場面は、理学療法士の介入で歩行練習を通して身体機能や危険察知能力についての情報を得る機会とした。また、理学療法士と看護師との情報交換の場面を入れることで、多職種連携における看護の役割について考える場面とした。

#### 5) [ライフヒストリーの聴取]（図2）

記憶障害や見当識障害など認知症症状のある高齢者への接し方として、非言語的コミュニケーションの活用、意思疎通ができないときの対応など認知症高齢者の意思を最大限に引き出すようななかかわり方を示した。また、認知症の非薬物療法の一つである回想法について実施する場面を取り入れることで、生活歴を活かしたコミュニケーションが記憶の活性化につながることを学ぶ機会とした。



図2 動画教材 [ライフストーリー聴取] の様子

### 3. 動画教材の配信

動画は、履修登録済み学生を対象に科目担当教員が利用者認証を得てログインできるように設定し、アクセス方法、いつでも繰り返し視聴可能できるように Web 配信した。介護施設実習において、認知症高齢者と実際に接するにあたっての事前学習として、学生に動画視聴を推奨した。なお、学生には動画視聴において動画教材をダウンロードすること、コピーすること等の禁止事項についても説明した上で配信した。

### 4. 研究期間

2023年5月～6月

### 5. 調査内容

介護施設実習終了時、Web 上の入力フォーム (Microsoft Forms) にて無記名アンケート調査を実施した。調査内容は、介護施設実習における活用状況として動画教材の視聴回数、実習中に認知機能が低下した高齢者とかかわった経験の有無について確認した。また、介護施設実習における動画教材視聴による学習効果として、高齢者とかかわり方の基本である「聴力に応じたコミュニケーション」「低めのトーンで穏やかにやさしい声かけをする」「患者と視線が合う位置で話しかける」「自尊心に配慮し、間違いや失敗は指摘しない」「入院前の情報

を大切にする」「その人が得意とすることやできることを引き出す」「不安そうな表情がみられたときは安心感を与える声かけをする」「非言語的コミュニケーション」の看護介入8項目についての自己評価を「実践できた」「指導のもと実践できた」「実践できなかった」の3件法で調査した。さらに動画教材を視聴して介護施設実習に役立ったエピソードについて自由記載の欄を設けた。

### 6. 分析方法

動画教材の視聴回数、介護施設実習における認知症高齢者とかかわりの有無、認知症高齢者に対する看護介入8項目についての自己評価は、単純集計した。学生の自由記載から動画視聴したことによる学習効果に関する記載を抽出、意味内容を整理しコード化を行い、類似性に沿ってサブカテゴリーを抽出し、さらに抽象度を高めてカテゴリーを抽出する質的帰納的分析を行った。

### 7. 倫理的配慮

研究対象者に口頭と文書で目的および調査内容を説明し、本研究に協力しなくとも成績の評価に影響しないこと、個人名が特定されないこと、得られた結果は、学会などで発表することを説明し研究協力を依頼した。学生の Web 上フォーム (Microsoft Forms) への入力および送信をもって研究協力への同意とみなした。本研究は Web 入力による無記名自記式質問紙であり、研究参加後は同意の撤回ができないことをあらかじめ文書に提示した。また、本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認 (受付番号：C22-0061) を得て実施した。

## Ⅲ. 結果

### 1. 動画教材の視聴回数 (図3)

介護施設実習に向けて活用した動画教材の視聴回数が最も多かった動画は、[ライフストーリーの聴取]であった。1回以上視聴した学生は69%であり、その内訳は、1回視聴した学生は57%、2回視聴した学生は11%、3回以上視聴した学生は1%であった。

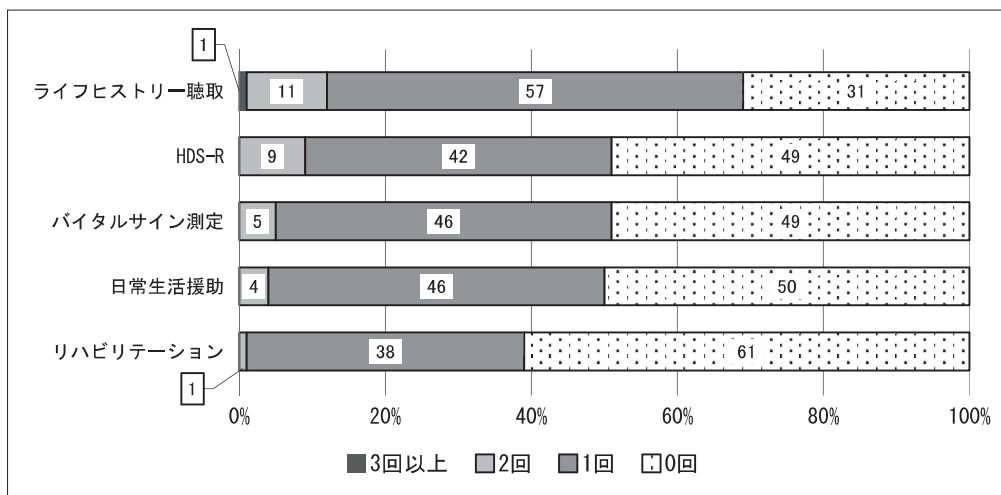


図3 介護施設実習に向けて活用した動画教材の視聴回数

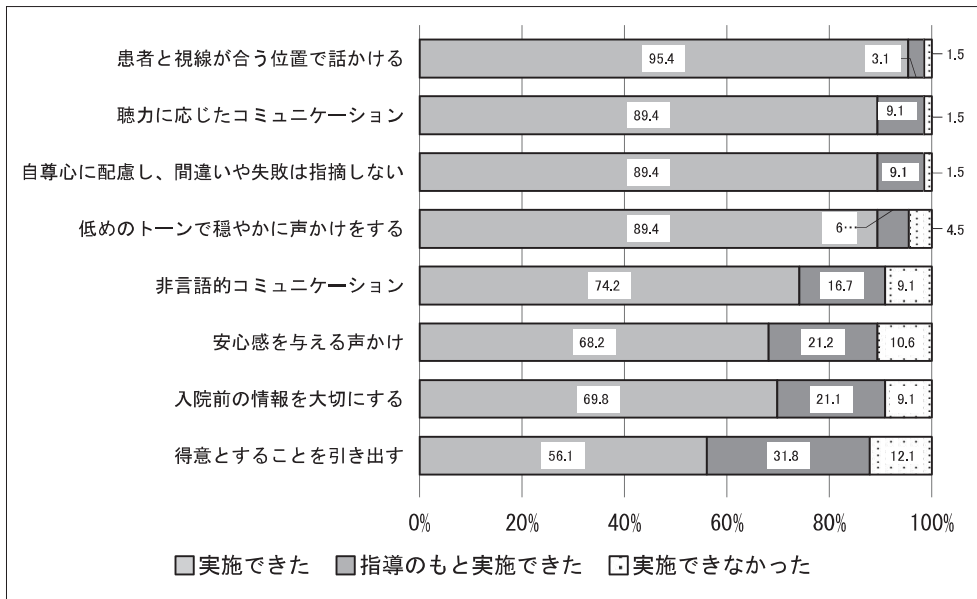


図4 認知機能が低下した高齢者に対する看護介入8項目についての自己評価

2. 実習中に認知機能が低下した高齢者とかかわった経験の有無

介護施設実習において認知機能が低下した高齢者とかかわった学生は66名で92%を占めた。

3. 認知機能が低下した高齢者に対する看護介入8項目についての自己評価 (図4)

認知機能が低下した高齢者への看護介入において学生が「実施できた」と評価した項目は、「患者と視線が合う位置で話しかける」95.4%、「聴力に応じたコミュニケーション」89.4%、「自尊心に配慮し、間違いや失敗は指摘しない」89.4%の順に多かった。一方で「実施できた」と評価した割合が最も少ない項目は、「その人が得意とすることやできることを引き出す」56.1%であった。

4. 動画教材を視聴して介護施設実習に役立つエピソード (表2)

自由記載の総記述数は31であった。以下カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〈 〉、コードは< >で示す。介護施設実習前に動画教材を活用することの学習効果についての記述を抽出し、学生が記述した内容を損なわないように類似性に沿って整理した結果、14コード、7サブカテゴリーから最終的に【ライフストーリーカードの活用方法を理解し実施できた】【認知機能評価についての理解が深まった】【認知機能に応じたかわりが実施できた】の3カテゴリーが抽出された。

1) 【ライフストーリーカードの活用方法を理解し実施できた】

学生は、〈ライフストーリーカードを実習で使用したときに動画での会話内容が参考になった〉と事前学習として動画を視聴したことで〈ライフストーリーカードを活用することで会話が続いた〉ことや〈ライフストーリーカードに興味をもってもらうことで会話が出来た〉

と実感していることから【ライフストーリーカードの活用方法を理解し実施できた】と命名した。

2) 【認知機能評価についての理解が深まった】

学生は、HDS-R 評価場面を動画視聴することで〈HDS-R のイメージができた〉ことや〈HDS-R 測定時に高齢者の回答に応じた声のかけ方を学んだ〉ことで認知機能評価における看護者の対応がイメージできたことから【認知機能評価についての理解が深まった】と命名した。

3. 【認知機能に応じたコミュニケーションが実施できた】

学生は、動画から認知症高齢者にかかわる看護師の観察をしており〈話す側が高齢者にどのような配慮が必要か学べた〉ことや〈認知症症状に対してどのようにかわるか参考になった〉ことで認知症症状のある利用者とのコミュニケーション実践に役立ったことから【認知機能に応じたコミュニケーションが実施できた】と命名した。

IV. 考察

介護施設実習では、認知機能および身体機能の低下をかかえた受け持ち利用者とのコミュニケーションから関係性を築きどのように看護介入していくかを把握する必要がある。3年次前期に行われる介護施設実習に参加する学生の特徴には、実習経験が浅いこと、高齢者の同居率の低さ(内閣府、2021)から日常生活の中で高齢者と接する機会は少ないことがある。そのため、年代の違う高齢者とのコミュニケーションに対して惑う学生も多い。この課題を解決するために、本学の介護施設実習ではライフストーリーカード(大塚、2015)、つまり高齢

表2 動画教材を視聴して介護施設実習に役立ったエピソード

カテゴリー (3)	サブカテゴリー (7)	コード (14)
ライフストーリーカードの活用方法を理解し実施できた	ライフストーリーカードを活用することで会話が続いた	ライフストーリーカードを実習で使用したときに動画での会話内容が参考になった 実習でライフストーリーカードを使ったとき話が途切れることなく続けることができた
	ライフストーリーカードに興味をもってもらうことで会話が出来た	ライフストーリーを用いて会話したときに興味をもつていただきコミュニケーションをとることが出来た ライフストーリーカードを用いて会話するときの始め方について理解することができた ライフストーリーカードの活用した会話の質問の仕方を参考にした
	高齢者の反応をイメージできた	ライフストーリーを用いたときの高齢者の反応がイメージできた
認知機能評価の対応についての理解が深まった	HDS-R のイメージができた	HDS-R をイメージしやすく、声のトーンや話しかけ方、質問の仕方の具体的イメージを持つことができた
	HDS-R 測定時に高齢者の回答に応じた声のかけ方を学んだ	HDS-R の会話の工夫や、どうやってその人の能力を引き出せるか動画を視聴して理解できた 動画教材と実習先の測定場面の両方から高齢者の対応の仕方を学ぶことができた 実習先で HDS-R の見学はできなかったが動画教材を参考に認知機能が把握できる会話をコミュニケーションの中に取り入れることができた
	認知機能に応じたかかわりが実施できた	話す側が高齢者にどのような配慮が必要か学べた 声のトーンや表情、スピード、受け答えの具体的な内容が学べた 会話をする環境を整えることを学んだ
認知機能に応じたかかわりが実施できた	認知症症状に対してどのようにかかわるか参考になった	つじつまの合わない時は戸惑ったが、動画教材を参考にかかわることができた 認知機能低下によって精神的不安定な利用者が笑顔で話してくれた

者が懐かしいと感じる昭和時代の暮らしを題材にした白黒写真を高齢者とのコミュニケーションにおける補助教材として活用している。樋田ら (2018) は、写真教材を活用することの目的として、学生は高齢者との会話の糸口となること、利用者と良好な関係を築きたいとの思いがあることを述べている。学生の自由記載からも「ライフストーリーを用いて会話したときに興味をもつていただきコミュニケーションをとることが出来た」と感じていた。つまり、ライフストーリーカードの活用が時代の異なる対象との共通の話題となりコミュニケーションの糸口となったという効果を学生自身が感じていたことが伺える。今回の調査対象となった学生においては、ライフストーリー聴取の動画教材が、介護施設実習の事前学習として多く視聴されていた。動画教材では、ライフストーリーカードを使ってコミュニケーションを開始するときの声かけや生活歴に合わせてライフストーリーカードを選択すること、ライフストーリーカードに対する患者の反応からどのように声かけするのかを示した。時代の異なる対象に対しライフストーリーカードを初めて使

用する学生にとって動画教材から活用方法を理解し、コミュニケーションの実践に有効であったことが示唆された。また、反応のあったカードの時代背景を学ぶことで高齢者の生活歴の理解を深めることに繋がる教材であり高齢者に対する看護介入「入院前の情報を大切にする」ことにも効果があることを学生に意識してもらえるように教授していきたい。

介護施設実習における高齢者への看護介入の実践で学生の自己評価が高かった3つの項目は、「患者と視線が合う位置で話しかける」、「聴力に応じたコミュニケーション」、「自尊心に配慮し、間違いや失敗は指摘しない」である。

1つ目の「患者と視線が合う位置で話しかける」は、認知症高齢者でなくてもコミュニケーションの始まりとして基本的な技法である。しかし、認知症高齢者は、後ろから声をかけられても認識できないことがあり、突然近くで声をかけられると驚き不安がつのる体験となる(北川、2020)。そのため、患者と視線が合う位置で話しかけることは、認知症高齢者との信頼関係づくりのきつ

かけとして重要と考え、その点を意識して作成したことが学生に伝わり実践に役立ったと考える。

2つ目の「聴力に応じたコミュニケーション」は加齢に伴って起こる老人性難聴の特徴を理解した関わりである。老人性難聴への対応には、声の高さ、大きさ、強さ、明瞭さ、スピード、周囲の騒音に配慮することで、高齢者が聞き取りやすくすることが求められる。学生の自由記載にも、＜声のトーンや表情、スピード、受け答えの具体的な内容が学べた＞とあり、対象の聴力に応じた配慮が動画教材より伝わり、実践できていたことがわかった。また、認知症高齢者に対して看護者側も時間にゆとりがないと話すスピードが速くなり、心を込めて聞くことができなくなることは、安心感を与える態度ではない(北川、2020)ため、対話時間の確保や落ち着いて話せる環境の大切さについて考えることができていた。

3つ目の「自尊心に配慮し、間違いや失敗は指摘しない」は、学生が認知症高齢者のコミュニケーションで戸惑う場面としてつじつまの合わない返答、会話が成立しないことであることはこれまでの研究報告(古市、2012; 柗崎、2007)から予測できていた。そのため動画教材の[長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R)]は、回答が間違っている場面を設定し、看護者が患者の回答の間違いを指摘しないことや、高齢者が回答してくれたことについて労いの言葉がけをし、安心感を与える対応場面とした。そのため、学生の自由記載からも、＜つじつまの合わない時は戸惑ったが、動画内容を参考にかかわることができた＞とコミュニケーションの実践に繋がっていた。

また、看護介入に対する学生の自己評価が低かった「その人が得意とすることやできることを引き出す」は、介護保険施設において、新型コロナウイルス感染症が5類感染症移行後も臨地での実習が制限されたことが影響していると考えられる。短い期間の実習では、受け持ち利用者との間に安心できる信頼関係を築くことができず、その人が得意とすることや引き出すための十分なかわりの時間が持てなかったことが影響していると考えられる。

調査対象となったA大学では、2020年度以降の入学生に対して、Windowsが搭載されたタブレットパソコンを配布しており、学内LANに接続できる環境が整っているため情報通信技術(ICT: Information and Communication Technology)を用いた学習方法は、馴染みやすいと考える。動画教材を配信したことで学生のペースで繰り返し視聴できる環境を提供したことで介護施設実習において約5割の学生が動画教材を活用しており、学生が能動的に学ぶ機会になったといえる。

認知症高齢者のコミュニケーション方法は、テキストなど学ぶ知識である認知領域だけではなく、興味・関心・価値観の変容や適応といった態度である情意領域(櫻井、2014)が重要である。先行研究において、動画教材の活用効果についての報告は、基礎看護技術の演習場面が多

い(古田ら、2022; 相原ら、2009)。成瀬ら(2015)は、基礎看護技術の達成度について手順通り行うことに集中するため基本的な手技は達成できるが、患者への声かけや気遣いなどの患者の反応に配慮した情意領域の到達が難しいと述べている。今回の認知症高齢者に対するかわり方に関する動画教材は、まさに看護者の声のかけ方、対象の反応によってどのような態度をとっているのかといった情意領域の学習内容となる。介護施設実習において、特に視聴回数の多かったライフヒストリー聴取の効果について櫻井(2014)は、異なる時代を生きてきた体験を聞くことで頼もしい生き方を尊重し、もっと知りたいと興味が深まったことで情意領域の学習効果に繋がったと報告している。動画教材を視聴して介護施設実習に役立ったエピソードの自由記載から動画教材の学習効果として【ライフヒストリーカードの活用方法を理解し実施できた】が抽出されておりライフヒストリーカードを用いて関わる場面の声のかけ方、対象の反応によってどのような態度をとるのか情意領域の学習効果も期待できる。さらに【認知機能評価についての理解が深まった】【認知機能に応じたコミュニケーションが実施できた】が抽出された。つまり学生は、動画教材の言語的なコミュニケーションから看護者がどのように接するかロールモデルとして参考にし、看護者の態度の中に含まれる非言語的コミュニケーションから、つじつまが合わないなどの認知症症状がある認知症高齢者と、意思疎通を図るイメージづくりに役立ったといえる。今回の結果のみでは受容的・肯定的姿勢についての学習効果は読み取れないが、ライフヒストリー聴取の動画教材を再検討する際に受容的・肯定的姿勢を分かりやすく伝えていきたい。

## V. おわりに

介護施設実習においては、独自で作成した動画教材を活用したことで【ライフヒストリーカードの活用方法を理解し実施できた】【認知機能評価についての理解が深まった】【認知機能に応じたコミュニケーションが実施できた】の学習効果に繋がったといえる。介護施設実習においては、ライフヒストリー聴取の動画教材が、認知症高齢者とのコミュニケーションの実践に有効であることが示唆された。

## VI. 研究の限界と課題

本研究の対象者は、A大学の学生による限られたデータであること、動画教材を用いる前後の自己評価の比較ができていないため、動画教材のみの学習効果として判断できないことは、本研究の限界である。しかし、独自の動画教材を利用することにより老年看護教育の質の向上に寄与できたと考える。今後は、動画教材を視聴したことで実際の看護場面にどのように役立ったかといった

学生の自己評価に加え、演習や実習における実際の学生の行動や言動を教員が客観的に分析することも視野に入れ、動画教材の学習効果について検証していきたい。

## VII. 謝辞

本研究の実施において、ご協力を頂きましたA大学の学生の皆様に深く感謝いたします。

## VIII. 文献

相原ひろみ 岡田ルリ子 徳永なみじ他 基礎看護技術の動画教材の開発－学生が動画教材に求める視点および生活環境の実態－, 愛媛県立医療技術大学紀要, 6 (1), 49-55, 2009

柗崎京子 実習初期段階学生の状況に即したコミュニケーション教育の検討, 共栄学園短期大学研究紀要, 23, 69-87, 2007

古市清美 認知症高齢者とのコミュニケーションにおける看護学生の困難感を抱いた場面, 日本看護学会論文集 看護総合, 42, 362-365, 2012

古田桂子 長谷川真子 馬場貞子他 基礎看護技術演習に患者の状態を設定した動画教材の効果と課題－全身清拭を題材にして－, 岐阜協立大学論集, 56(1), 1-9, 2022

北川公子他 系統看護学講座専門分野Ⅱ老年看護学 第9版, 医学書院, 307-309, 2020

葛原誠太他 老年看護学演習における視聴覚教材活用の効果, 産業医科大学雑誌, 35(2), 173-182, 2013

内閣府 平成29年版高齢社会白書高齢者の健康・福祉, 2017 ([https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/gaiyou/sl\\_2\\_3.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/gaiyou/sl_2_3.html). 2023年7月21日閲覧)

内閣府ホームページ「令和3年度版高齢社会白書」, 2021 ([https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/pdf/1s1s\\_01.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf). 2023年7月15日閲覧)

成瀬かおる 白尾久子 網野寛子他 基礎看護技術演習習熟に関する学生の認識と到達度についての研究 基礎看護技術テスト後の質問紙調査, 帝京平成大学紀要, 26(1), 53-61, 2015

大塚和彦 ライフヒストリーカード, ヴィジョナリー・カンパニー株式会社, 2015

櫻井清美 尾島喜代美 ライフヒストリーインタビューを在宅高齢者に行った看護学生の思い－情意領域の学習効果－, 日本看護学会論文集 地域看護, 44, 192-195, 2014

樋田小百合 平澤園子 熊田ますみ 高齢者看護学実習における写真教材の活用目的と活用による効果, 教育医学, 64(2), 159-166, 2018